

一ノ六、阿娑縛抄卷二百二、名所事

出典 大日本仏教全書四十一

解説 同じく阿娑縛抄の名所事の項に一代峯(笠置山)のことを記す。内容は字句に至るまで殆ど一代峯縁起(資料一ノ一にあり)と同じである。

原文

一代峯者天武天皇御宇

大和国東北ノ楞東高山。名テ曰ニ一代峯一。在ニ三部峯一。金剛間峯果曼茶羅。金峯山大聖威徳天。

蘇悉地峯。一代峯笠置石屋。補処ノ弥勒慈尊。胎藏界ノ峯。因曼茶羅。三部峯如レ此。役ノ優婆塞。自鳳十二年夏四月廿二日。始テ攀ニ登此峯一。修行生中ノ之間第七度。此ノ峯有ニ仙宮六所一。因レ茲上宮太子如法経五部書写安置シ。造ニ七重ノ馬腦石塔一籠ニ其内一給。受役ノ行者至ニ随喜意一発ニ信心一。於ニ笠置石屋一兩部如法経書安置石中一給。天人聖衆下所レ奉ニ供養一也。其供養于レ今不レ絶。彼ノ金峯山ハ是レ兜卒天ノ内院。一代笠置ノ峯ハ兜卒天ノ外院也。其後來去経テニ二百餘歳一。道賢修ニ行存此峯一。第九度ナリ。延喜八年八月十二日。笠置ノ石屋攀登。五七日籠。其ノ間三部ノ秘法十二時勤修シ。得ニ天人供養一天人告言。此山下ニ有池。縦広四十里。池内ニ満ニ七宝一。其池上東ニ石像慈尊経ニ四百歳一。若シ出ニ此池一。至心如法修行レハ者。必往ニ生極樂世界一。現生随ニ所願一與ニ財宝一。虚空藏ノ石室龍穴中入少一里許。有ニ石門一。開見ニ在ニ大日宝殿一。且ツ思惟ノ間。持レ呪満ニ三洛叉一。泛レ宮殿内ニ人ノ鬼神出來。問テ云。汝何者ツ哉。答曰。日本国椿木寺ノ住沙門道賢也。返問云。君ハ誰人ソ。答我ハ二天ニ童子也。又問云。此土何所ソ哉。二天答曰。是兜卒天ノ外院也。因レ茲奉レ顯ニ慈尊御正体一云々。又此峯有ニ仙宮一。内有下読ニ誦兩部大乘一僧上。坐ス。僧云。我身雖レ有ニ他国一。常有ニ三部峯一。云々。件僧者。昔役行者也。行者與ニ日藏一兩人誓云。我等住ニ此峯一。守ニ護末代行者一云々。当山ハ是レ非ニ此土地一。但耆闍崛山ノ戌亥ノ角闕來ニ此土一也。高声童子常ニ來ニ此土一也云々。

読み下し文

一代峯は。天武天皇の御宇

大和国、東北の楞東に高山あり。名づけてを一代峯と曰ふ。三部の峯在り。金剛間(界?)峯、果曼茶羅、金峯山大聖威徳天なり。

蘇悉地峯、一代峯笠置の石屋は補処の弥勒慈尊。胎藏界の峯、因曼茶羅なり。三部の峯此の如し。

役の優婆塞は、白鳳十二年の夏四月廿二日、始めて此の峯に攀登し修行す。生中の間第七度(役の行者は七度生を変えているといわれる)なり。

この峯に仙宮六所あり。茲に因り、上宮太子、如法經五部を書写、安置し、七重の馬惱(宝石の一種)の石塔を造りてその内に籠め給ふ。受けて役行者、随喜の意を至して信心を発し、笠置石屋に於いて両部の如法經を書き、石中に安置し給ふ。天人聖衆下りて供養し奉る所なり。その供養今に絶えず。

かの金峯山はこれ兜卒天の内院にして、一代笠置の峯は兜卒天の外院なり。その後來たり去ること、二百余歳を経て、道賢、此の峯に修行すること、第九度なり。

延喜八年八月十二日、笠置の石屋に攀登し五七日籠る。その間三部の秘法を十二時(二昼夜)勤修し、天人供養を得る。

天人、告げて言はく、

「この山下に池あり。縦広四十里にして、池の内に七宝満ち、其の池上東に石像の慈尊あり、四百余歳を経る。若しこの地に出でて至心に如法を修行せば、必ず極樂世界に往生す。現生は所願に随ひて財宝を与へん」と。

虚空蔵の石室、龍穴の中に入ること少一里許り、石門有り。開きて見るに大日宝殿在り。且つ思惟する間、持咒三洛叉(三十万遍)を満たす。宮殿の内より二人の鬼神出で來たる。問ひて云う、「汝は何者なるや」と。

答へて曰はく、「日本国椿木寺に住む沙門道賢也」と。

返りて問ひて曰はく、「君は誰れ人なるや」と。

答へに、「我は二天二童子(童形を現じて仏法を守護する神)也」と。

又問ひて云はく、「この土は何れの所なるや」と。

二天答へて云はく、「是れ兜卒天の外院也。茲れに因り慈尊の御正体を顕はし奉る」と云々。

又此の峯に仙宮あり。内に両部の大乘を讀誦する僧有りて坐す。

僧云はく、「我が身他国にありと雖も、常に三部の峯にあり」と云々。

件の僧は昔の役行者也。行者、日蔵と兩人、誓いて云う

「我等、この峯に住みて末代の行者を守護せん」と云々。

当山はこれこの土地に非ず。但し耆闍崛山(インドマガダ国の首都、王舎城の東北にある山、釈迦説法の聖地)の戊亥(西北)の角、欠けて、此の土に來たる也。高声童子、常に此の土に來たる也と云々。